

# 建設業と農林水産業の連携シンポジウム

## - 建設帰農・林建協働の十年の歩み -

共催 農林水産省、建設トッパーナー倶楽部  
 日時 平成27年2月6日(金) 13:00～16:00  
 場所 農林水産省 7階講堂 (東京都千代田区霞が関1丁目2番1号)

### 開催趣旨

建設帰農、林建協働、農商工連携など、地域の農林水産業への参入・連携に、建設会社が本格的に取り組みはじめて十年が経過しました。本シンポジウムでは、今後の建設業と農林水産業との一層の連携促進に向けて、農林水産業に参入した建設会社のその後の歩みを報告します。多くの課題をのりこえながら前進した十年の軌跡を振り返りながら、地域の建設業と農林水産業の連携による地方創生の今後の可能性について議論します。

### 【申込方法】

下記のホームページの申込フォームからお申込ください。

<http://www.kentop.org/>

### 【会費】 無料

### 【問い合わせ先】

建設トッパーナー倶楽部 事務局  
 〒113-0023 東京都文京区向丘1-5-4  
 ワイルズ2階 米田事務所内  
 中川寛子, 大里茂登子  
 TEL 03-5876-8461  
 FAX 03-5876-8463  
 Mail: [info@kentop.org](mailto:info@kentop.org)  
 ホームページ: <http://www.kentop.org/>

### 農林水産省担当

農林水産省大臣官房政策課 宮嶋, 藤本  
 TEL 03-3502-8448

### プログラム

【13時00分-13時20分】

主催挨拶 農林水産事務次官 皆川芳嗣  
 趣旨説明 建設トッパーナー倶楽部代表幹事 米田雅子

【13時20分-13時52分】

1. 建設業の農業参入事例 (1社4分、5社)

①あぐりから地域総合産業へ	愛亀	西山 周	愛媛県
②無農業ハープで農商工連携	舟山組	舟山秀太郎	北海道
③高品質アスパラガス栽培と販路開拓	幌村建設	幌村佑規	北海道
④オランダ型トマト菜園と木質バイオ利用	未来彩園	深松 努	宮城県
⑤次世代型植物工場いちごカンパニー	小野組	小野貴史	新潟県

アドバイザーによる質疑応答と講評 (1人6分、2名)  
 農林水産省 経営局審議官 山口英彰  
 経済産業省 大臣官房審議官 若井英二

【13時54分-14時30分】

2. 複業による地域創生事例 (農業・林業・水産業・観光等) (1社4分、5社)

①森林・農業・地域再生	佐久間建設工業	佐久間源一郎	福島県
②木材リサイクルから足柄茶、荒地地再生	富士建設	文字正和	神奈川県
③漁協と連携、佐渡島フードで地域おこし	廣瀬組	廣瀬俊三	新潟県
④隠岐牛と定置網で島おこし	飯古建設	田仲寿夫	島根県
⑤柱状礁による漁場の再生、繁殖牛の飼育	金田建設	宮川則男	島根県

アドバイザーによる質疑応答と講評 (1人6分、2名)  
 農林水産省 農村振興局農村政策部長 佐藤速水  
 水産庁 漁政部長 水田正和

【14時30分-14時45分】 休憩

【14時45分-15時17分】

3. 林建協働の事例 (1社4分、5社)

①林建協働による森林路網整備の推進	たかやま林建	長瀬雅彦	岐阜県
②岐阜県の林建協働の紹介	下呂林建共同企業体	森本繁司	岐阜県
③林建協働による苗木生産事業の創出	郡上森づくり協同組合	小森胤樹	岐阜県
④異種の道ネットワーク実現をめざして	杉山建設	杉山文康	岐阜県
⑤下山パークパークとブルーベリー農園	鈴鍵	梅村正裕	愛知県

アドバイザーによる質疑応答と講評 (1人6分、2名)  
 林野庁 国有林野部長 黒川正美  
 国土交通省 大臣官房 建設流通政策審議官 吉田光市

【15時19分-15時55分】

4. 森林再生・地域創生・森林資源活用事例 (1社4分、5社)

①オホーツク振興 / 農業参入から苗木まで	管野組	管野浩太郎	北海道
②紀州の間伐材で地域を元気に	川口建設	川口明久	和歌山県
③間伐材活用の軟弱地盤補強工法	日本建設技術	原 裕	佐賀県
④青森ひばの香りで五感を潤す環境を提供	大見海事工業	大見義紀	青森県
⑤林産と畜産の堆肥製造と広域流通	内山建設	内山雅仁	宮城県

アドバイザーによる質疑応答と講評 (1人6分、2名)  
 林野庁 森林整備部長 本郷浩二  
 国土交通省 大臣官房技術審議官 山田邦博

【15時56分-16時】

閉会の言葉

※ アドバイザーは変更となることがあります。

# 深松氏(深松組)が講演

深松組(仙台市青葉区)の深松努代表取締役は6日、農林水産省本館7階講堂で開催された「建設業と農林水産業の連携シンポジウム」で講演した。建設業の農業参入事例として、トマト菜園と木質バイオマス利用について、10年間の取り組みや今後の課題を報告した。

このシンポジウムは、農林水産省と建設トップランナー倶楽部(米田雅子代表幹事)が共催。約360人が参加した。農林水産業に参入した全国の建設会社が、これまでの歩みを紹介した。



シンポジウムで講演する深松氏

冒頭、皆川芳嗣農林水産事務次官は「建設業は地域の最後の守り手である」と強調。「このシンポジウムを通じて、政府が掲げる地域創生の実現に向け、建設業と農林水産業の新しい連携を模索していきたい」とあいさつした。

深松氏は、深松組グループの未来彩園(黒川郡大衡村)で行っているトマト菜園と木質バイオ利用について講演した。同社は、1ha規模の大型園芸施設を17年に設立。オランダ型トマト温室と全自動型の環境制御装置を用いて、高収量・高品質

## 農業参入の経験語る

のトマト生産を目指してスタートした。19年には本県で初めてJGAP(農業生産工程管理手法)認証農場となり、安全で品質の良い農作物を安定して生産することに成功。この事業を進めていきたく、現在、本県でトップクラスの農場に成長した。

木質バイオマスの利用については、A重油価格の高騰で経営を圧迫したため、4年前から地元の森林組合と連携し、木質チップバイオマスボイラーを導入。年間約45%の使用燃料削減を実現した。

深松氏は今後の展開について、4月に外国人の栽培指導員を雇用するとともに、コンサルティンク業務を進めていく考えを表明。「これからも、いろいろな仲間と一緒に、この事業を進めていきたい」と意気込みを語った。

農林水産省の山口英彰経営局審議官は「非常に先進的な取り組みだ」と講評するとともに、バイオマスボイラーの有効性をデータで示したことに謝意を示した。

## トマト菜園や木質バイオ